

〈第2章〉 研究の内容

【視点1】

「基礎的・基本的な知識や技能を習得及び活用する学習活動」と「これまでに培われてきた力を発揮して問題解決に取り組む探究的な学習活動」を効果的に盛り込んだ単元構成の工夫を図ることにより、基礎・基本の定着と共に思考力・判断力・表現力等の力を育むことができる。

1. はじめに

「形式的な」問題解決的な学習の改善

本研究では、問題解決的な学習を基盤としながら学習指導の在り方を探っている。これまでも問題解決的な学習を基盤として研究が進められ、多くの検証授業を通して、その効果が明らかとなっていることは確かなことである。

しかしながら、日常の実践の中で問題解決的な学習が展開されていても、それは学習過程を形式的にとらえた実践が多いのではないかという課題が、全国的にもまた管内小中学校の現場でも指摘されている。

ここでいう「形式的な問題解決的な学習」とは、

- ◆子どもたちが問題意識を持って、その解決に取り組むような展開ではなく、受身的な学習となっている。
- ◆学習課題が子どもたちにとって必要感や切実感がないまま解決に取り組んでいる。
- ◆自力解決で一人一人の子どもたちが自分なりの考えを持ったとしても、それを生かすことをせず、全体で練り合うことのないまま教師から一方的な形でまとめが提示されている。
- ◆身についた知識や技能、考え方を活用し、新たな課題を解決したり、子どもたちの生活に生かしていく工夫が乏しい。

などのことを指摘されるような学習である。

これらの管内教育現場における課題をふまえると共に、各教科の特性を生かしながら単元構成の在り方を見直し、構築していくことが大切であると考える。

2. 「基礎的・基本的な知識や技能を習得及び活用する学習活動」と

「これまでに培われてきた力を発揮して問題解決に取り組む探究的な学習活動」

(1) 「基礎的・基本的な知識や技能を習得及び活用する学習活動」とは

学習指導を展開する際に「基礎・基本の定着」が図られることが何よりも大切である。まずはその単元で身につけなければならない基礎・基本を教師がしっかりと明確にすることが必要であり、それを単元全体を通して子どもたちがどのようにして身につけていくかという道筋を計画していくことが重要となる。

単なる教え込みではなく、考えさせる指導の工夫を

その過程において、単に教え込みの学習時間とするのではなく、子どもたちに課題意識を持たせ、学習意欲を喚起する工夫が重要となる（視点2とのかかわり）。基礎・基本の習得を第一の目的とした授業でも、教え込みに終わるのではなく、「教師からの指導事項」と「子どもたちが考えた、気付いたりできる事項」を明確にし、指導の工夫も図っていくことが

必要と考える。

さらに、習得した基礎的・基本的な知識や技能を活用し、新たな問題を解決する場面の設定も必要である。生きて働く力を培うには、身についた知識や技能を使うことができるという実感を伴わなければ、子どもたちにとって、有意義な学習となったとは言えないと考える。

「習得」と「活用」
のバランス

「習得を中心とした学習活動」と「活用を中心とした学習活動」は、明確に分離できるものではなく、相互に関連しあい、時には一単位時間のなかに両方のねらいが含まれる場合も考えられる。大切なことは、単元を通して、子どもたちに身につけたい力は何かを明確にし、その学習内容と学習活動に整合性が持たれ、効果的に位置付けられているかということである。

(2) 「これまでに培われてきた力を発揮して問題解決に取り組む探究的な学習活動」とは

本研究における探究的な学習活動とは、子どもたちがこれまでに培われてきた力を発揮して問題解決に取り組む姿を目指して行われるものと考えられる。

教科・単元の特性を生かす

したがって、さまざまなパターンがあるものであり、その教科または単元によって臨機応変に単元全体の中に位置付けられるものである。

たとえば、

◇単元終末に位置付け、それまでに身についた知識や技能を発揮し発展的な学習として展開されるもの

◇単元のはじめに位置付け、探究していくことで新たな疑問等が生まれ、それらを解決するために、学習のスタートとして展開されるもの

などが考えられる。

これらについては、上記でも述べたが、教科や単元の特性によって、その学習効果が得られるように考えて設定されることが大切である。

3. 単元構成を考える際に

これまで述べてきた「基礎的・基本的な知識や技能を習得及び活用する学習活動」と「これまでに力を発揮して問題解決に取り組む探究的な学習活動」は、一単位時間のなかで、明確に分けられないことも考えられる。何よりも大切なことは、教科・単元の特性をふまえ、また子どもたちの実態に応じ工夫された単元構成となることが重要である。

このように学習内容のねらいに沿い、上記にある学習活動が効果的に位置づけされた単元構成の工夫を図ることにより、基礎的・基本的な知識や技能が身につき、それを生かしながら、思考力・判断力・表現力等が単元を通して育まれ、子どもたちに学習意欲を高めていくことにつながると考える。

【視点2】

問題解決的な学習を基盤とし、「課題意識（問題意識）」を持ちながら、解決に向けた「自分なりの考え」をもとに、「仲間と共に学ぶ場」を意図的に設定した学習過程とその指導の在り方の工夫改善

1. はじめに

学習過程の工夫とその指導の在り方の工夫改善

小単元や1ユニットの学習過程を工夫することで、子どもたちの思考の流れを大切に、子どもたちが主体となった学習活動を進めていくことができる。具体的には、

- ◆授業の導入時に、学習の見通しをもてる題材や課題を取り入れること
- ◆身近で生活に関わる題材や課題を取り上げることで、子どもの問題意識を喚起させること
- ◆学習する内容と既習してきた内容との流れをつなげ、思考の連続性や整合性を子どもたちに持たせることで、見通しを持ち主体的に学ぶ姿勢をつくること
- ◆問題解決的な学習を基盤とすることで、一人ひとりが自分なりに解決に向かう場面を多くつくること
- ◆共通のつまずきを解決しあったり、自分たちの解決方法について比較・検討したりする鍊りあいの場面を設定することにより、互いに認め合い、高まりあう経験を重ねていくこと
- ◆自己評価・相互評価をする場面を多く取り入れ、自信をつけたり、今後の学びに生かそうとすること

など、多くの工夫により、「あっ！そうだったんだ！」、「なるほど！」といった具体的な声につながるようになる。

学習過程を、子どもたちの思考の流れにおいて、子どもたちが主体となって学習活動を進めていくことができるよう組み立てることで、自ら考える力の育成につながると考える。

2. 「課題意識（問題意識）」を持ちながら、解決に向けた「自分なりの考え」をもとに、

仲間と共に学ぶ場を意図的に設定した学習過程の工夫改善に向けて

（1）「課題意識（問題意識）」を持ちながら、解決に向けた「自分なりの考え」の大切さ

問題解決的な学習を基盤として

問題解決的な学習を基盤とすることで、一人ひとりが自分なりに解決に向かう場面や仲間とつまずきを共に解決しようとする場面が多くなっていく。すると、必然的に「自分なりの考え」が必要となるが増えていくことになる。根拠があいまいなままでも「自分なりの考え」を持ち、仲間と交流し、比較・検討したり様々な意見を聞くことで、よりすっきりした考えをみつけだそうとするなど、主体的に学びを進めることにつながっていく。まさにこのような姿が、主体的に学習を進められることになり、学ぶ楽しさにつながるようになる。

また、小単元やユニットの学習過程を工夫することで、問題意識を喚起し、それを持続させることも同様に大切になると考える。

「課題意識（問題意識）」を持ちながら、「自分なりの考え」を持つための学習過程の工夫としては、

- ◆既習との関連がつながり学習の見通しが持てる授業の導入

- ◆身近で具体的な問題や課題の設定
 - ◆問題解決的な学習を基盤にした、仲間との交流の場の設定
- などが考えられる。

また、子どもが学びを進めいく上で、「自分なりの考え」を持つことで、それが正しいか正しくないかだけではなく、「なんでかな?」「どうしてだろう?」という課題を追究するような疑問を持つことが、さらに学習を深めたり積み重ねることにつながっていく。

(2) 仲間と学びあうことの大切さ

「自分の考え」を
もとにして

学校という集団生活の場において学ぶよさとして、仲間と共に学ぶことが挙げられるだろう。一人で学ぶことや指導者と1対1での関係の中では味わうことのできない、貴重な体験ができるようになる。たとえば、

- ◆互いの考えのよさを伝えあうなど交流を深め、自己評価・相互評価を繰り返していく中で、考えをより深めたり広げたりするなど、より思考を発展させることができる
- ◆仲間を評価したり自らの考えをわかりやすく伝えるなど、人に考えを伝える能力を高められる
- ◆多様な考え方にふれ、様々な角度からものを見ることができる
- ◆互いによりよいものをめざそうとすることで、意欲を継続させられる
- ◆他者からの評価で学びに自信を持ち、次への学びにつなげられる

などが挙げられる。仲間と多く学ぶ場面を取り入れ、子ども同士の学びあいから、感じ・気づき・確かめることが、自ら考える力の源へなっていく。自分の考えを基にして学びを進めることで、いきいきとした仲間との交流が生まれ、目的意識を待ったスムーズで効果的な交流が生まれることが期待できる。多くの仲間に関わることで、自己の学びの課題認識にも広がりとお行きがでる。その広がりとお行きがまさに、自ら考える力を育てることになるはずである。

(3) 仲間と学ぶ場の意図的な設定

子どもたちが主体となる
学習活動を

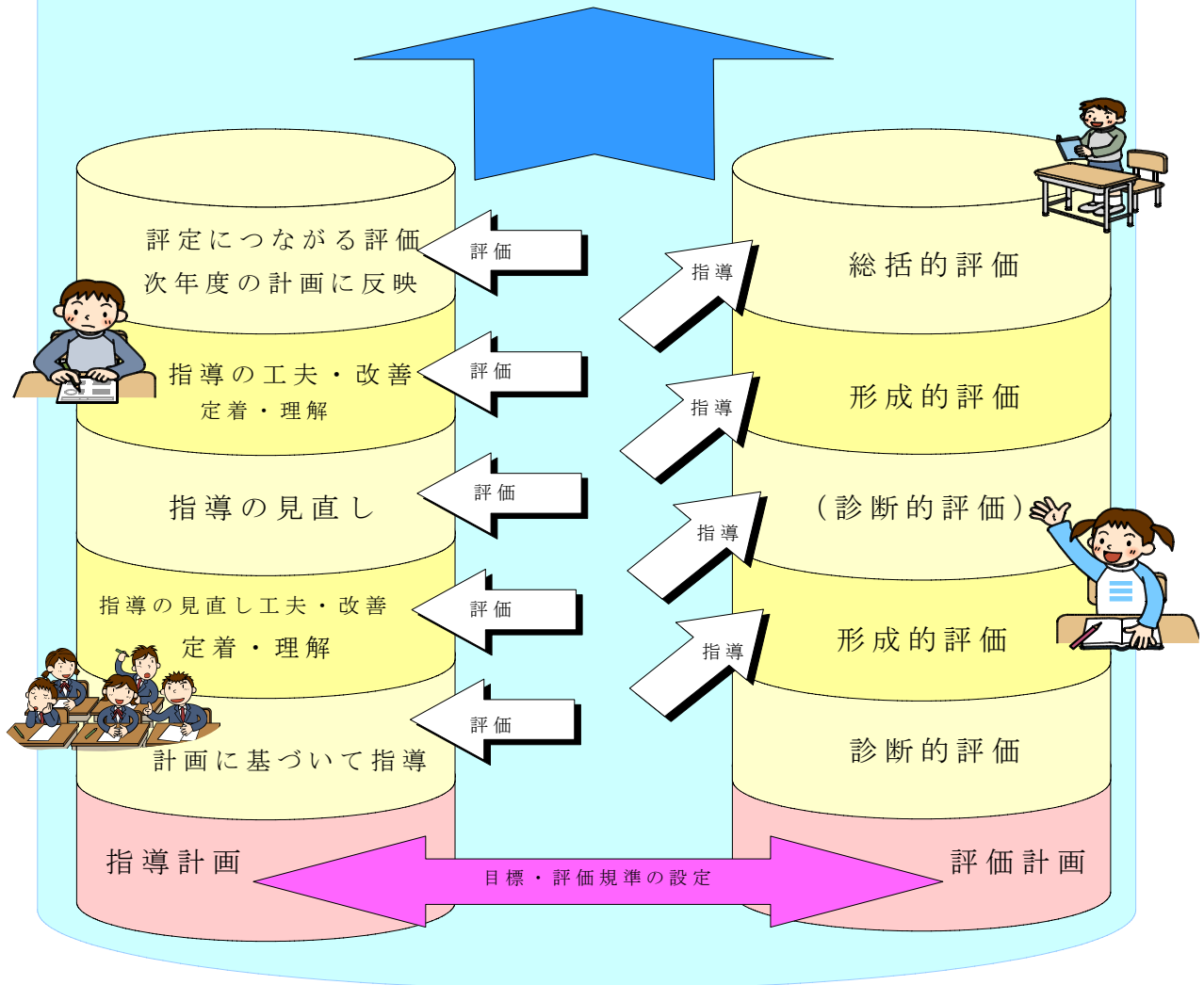
仲間と共に学ぶ場を設定した学習過程の具体的場面として、

- ◆考える時間を保証し、自分の考えをもとにした小グループ交流の設定
- ◆目的に応じたグループの設定方法の工夫
 - ・同じ考え方で集まるグループわけ
 - ・問題や課題の習熟度ごとに集まるグループわけ
 - ・作業効率を考え2, 3人の少人数でわかるグループわけ
 - ・学習内容に応じて指導者の意図したグループわけ
- ◆全体の練りあいにおいて、他者からの評価を積極的に取り入れ、次の自らの学びに還元させる活動
 - ・自己評価や相互評価を行う場の設定
 - ・「小グループでの交流をもとに、なにを全体で話し合うのか」の明確に位置づけ、目的意識をもった全体での練りあい
 - ・「わからないこと」を言い合える雰囲気をつくる授業づくり

など、子どもたちが主体となって学習を進めていけるような、学習過程づくりや、指導方法の工夫をすることで、いきいきとした子どもたちの活動が生まれる。そのような活動を繰り返して経験を重ねていくことで、自ら考える力が育っていくと考える。

評価を指導に活かす

より効果的な指導・評価



1. 評価の充実と授業改善

授業を改善するためには

子ども達の学力を、「知識・技能」の量のみではなく、「意欲・関心・態度」や「思考・判断」を大切にすると共に、評価規準を明確にし、評価方法の工夫を図ることは、すなわち授業自体の改善である。学力を4観点または5観点で考えると、観点それぞれを高める指導場面が必要であることは言うまでもなく、指導したことについては、その成果と課題を評価して次の指導に活かすことが大切である。評価の充実と授業改善は表裏一体であり、我々教師は評価観のあり方を窓口にして授業そのもののあり方を常に自己点検しながら、よりよい授業の構築に取り組む必要がある。

2. 3つの評価

効率的・効果的な評価

評価は評価をする時期によって、(1) 診断的評価、(2) 形成的評価、(3) 総括的評価の3つに分けることができる。意図的で計画的な評価を行うためにはこれらの評価を効率的かつ効果的に行う必要がある。計画をしっかりと立て、指導し評価することによって評価に対する客観性や信頼性が維持され、子ども達に自信を与え意欲的な学びにつなげていくことができるのである。

(1) 診断的評価…単元を指導する前に子ども達の興味・関心や既習事項の定着などを捉える評価。子ども達の実態に応じた指導計画を組み立て、より効果的な指導をするために行う。

(2) 形成的評価…単元を指導する過程で、目標の実現状況を捉える評価。子ども達の一人一人の実現状況に応じ指導・支援するために行う。

(3) 総括的評価…単元の終末に、単元の目標の実現状況を捉える評価。その単元の指導がねらい通り行われたかどうかを捉え、その後の学習などに生かすために行う。

3. 「いつどこで・何を・どのように」評価するのか

指導計画と評価計画

指導計画と評価計画を充実させるためには、指導内容や学習展開と評価規準や評価の方法が一体となって構築されていなければならない。

すなわち「いつどこで(場面)・何を(観点)・どのように(方法)」評価するのかということを指導計画に位置づける必要がある。

(1) 年間指導計画

実際に指導計画を立てるときに同時に評価計画も立てることで、指導と評価を結びつけて考え評価がスムーズに行えるようにする必要がある。

国語科年間指導計画・評価計画

月	単元・教材	学習目標	学習活動	指導上の留意事項	評価の観点					評価規準	評価の場面と方法	学習指導要領との関連	備考
					関	話	書	読	言				
7月	オツベルと象	1. 白象やオツベルにとって何が大切なのかを想像する。 2. 作品の構成や展開をとらえる。	1. 場面の移り変わりを考えながら、物語の内容をとらえる。 2. 表現や展開のおもしろさを発見し、内容を読み味わう。 3. 主題を考える。	1. 作者について、他の作品について詳しく触れる。	○					1. オツベルと白象の価値観やものの見方・考え方の違いをとらえ、自分なりの考えを持つ。 2. 同様の表現の繰り返しや語り手の存在など、作品の構成の工夫に気付く。 3. 語りの口調で表現されていることに気付き、擬声語や擬態語の働きに気付く。	ノート ノート 朗読	関心 読む 言語	

(2) 単元の評価規準

年間指導計画・評価計画をより具体的に考えていくためには単元の評価

規準を考えることになる。単元を通しての身につけさせたい力を明確にするものである。

単元の評価規準

観点	関心・意欲・態度	話す・聞く	書く	読む	言語事項
評価規準	オツベルと白象の価値観やものの見方・考え方の違いをとらえ、自分なりの考えを持つ。		白象の気持ち、オツベルの人物像などを含む感想をまとめる。	同様の表現の繰り返しや語り手の存在など、作品構成の工夫に気付く。	語りの口調で表現されていることに気付き、擬声語や擬態語の働きに気付く。

(3) 単元の評価計画

さらに具体的に考えていくには、一単位時間の評価計画を作成することになる。一単位時間の目標や評価規準を作成することで、より正確に子どもの実情をとらえ、指導に反映することが出来る。また、指導のポイントを再確認することになり、評価をスムーズに行うことにつながるのである。

単元の評価計画

観点 時数	関心・意欲・態度	話す・聞く	書く	読む	言語事項
1	白象がオツベルの小屋を訪ねた理由、オツベルが白象を受け入れた理由を表現から探し、そのずれを指摘する。		初発の感想をわかりやすく書く。		
2				第1日曜、第2日曜の登場人物と出来事をとらえ、その因果関係を指摘する。	
3				第5日曜の登場人物と出来事をとらえ、その因果関係を指摘する。	
4	日常を振り返り、擬声語や擬態語を使った表現を探し、その働きに気づく。				擬声語や擬態語を文章中から選ぶ。
5	オツベルと白象の価値観やものの見方、考え方の違いをとらえ、自分なりの考えをもつ。		白象の気持ちやオツベルの人物像などの感想を書くことが出来る。		

4. 学習過程を評価し、指導の改善に生かす

その時間に重点としている評価規準に照らし合わせ、努力を要すると評価した個への指導・支援の手だてをあらかじめ計画しておくことで、さらに指導と評価の一体化が図られ、よりよい指導が展開されていくと考えられる。そうした評価活動の中で総括的評価・評定につながる評価も当然大切であるが、形成的評価を大切にしたい。なぜなら、子どもは教師が思っているほどわかっていないことが多い。わからないと関心や意欲もわかな

努力を要する
子どもへの手だて

い。だからこそ、要所、要所で子どもの理解を確かめ、だめだったらフィードバックをしたり、あるいは次の関連の時にオーバーラップして指導したりしながら励まし、子どもの躓きを取り除いたり和らげたりして問題解決できるよう指導・支援をしていくことが重要となるのである。つまり評価した内容を指導に反映させていくことが大切なのである。

効果的に指導を進めていくために、何よりも評価を指導に活かしていくということが重要である。

評価を指導に活かす

評価を指導に活かすために重要なことは、子ども達の学習状況を指導過程の中で評価し、それを指導の改善に生かし続けるということである。次時の授業、来年度の計画へ日々の評価を反映させていくことは、指導と評価の連関性が生まれることであり、スパイラル形式でつながって授業改善されていくことになるのである。